

みやけの風

第 251 号

平成17年(2005年)12月3日(土)発行
 発行：三宅島災害・東京ボランティア支援センター
 発行責任者：上原 泰男
 東京都新宿区神楽河岸1-1 セントラルプラザ 10階
 東京ボランティア・市民活動センター 気付
 TEL：03-3260-7573 FAX：03-5229-1646
 E-mail：tokyocenter@cmpo.org

東京では12月に入ったというのに、まだまだ紅葉も残りずいぶん暖かい師走を迎えているなと思ったら、今朝はずいぶん冷え込みました。三宅島では先日の大雨と雷にビックリされたようですね。今週末から月曜にかけて冬寒気団が降りてくるようです。どうぞ暖かくして、お過ごしくださいませ。

みんなの声

三宅島で会えるなんて

三宅島の避難生活が縁で結ばれた「神奈川県立中央農業高校」の生徒さんが、11月26日に「風の家」に来て、クリスマス飾りのリースの作り方を教えてくれると聞き、参加しました。

2月1日、避難が解除され三宅島に帰るとき、竹芝桟橋で花束をいただいたお礼を言いたかったからでした。

2月2日、三宅島の我が家に着き、仏壇に位牌を納めて、「あっ、コウバナがない、花も」と思ってぼんやりしていた時、船に乗るときいただいた花を水に付けて流しにおいたのが目に入り、「あっ、この花があった」と仏前に供えさせていただいたのでした。その時の嬉しかったことのお礼状は出したのですが、三宅島に来てくださるのなら、お会いして直接お礼を言いたいと思っていました。

家庭の事情で最後までいられなかったのですが、引率の先生とリース作りを教えてくださいました生徒さんに直接お会いしてお礼を言えたのがよかったです。

多くの方に心遣いいただいたことはいつになっても忘れることはないな—とつくづく感じています。深く感謝の想いをこめて、

(阿古 鈴木 則子)

素敵な三宅島になれることを夢みて

都道を車で走っていると、御蔵島、神津島、新島、利島、大島がはっきりと見えるこの頃の三宅島です。本当に素敵なこの風景に酔いしれてしまいそうです。

この大海原を見た時こそ、島に住んでいる事の幸せを感じています。ただ、火山ガスは依然多くて、昨夕も坪田方面で警報が発せられました。まだまだ毎日どこかの地区で注意報、警報の放送が流れています。その度に、その

地区の方々を考えると、心が痛みます。

でも、ガスとの共生で、生活を足踏みしていたのでは、いつまで経っても島の活性化は望めません。

私は、最近、神着の老人会から入会の誘いを受けました。今まで休止していた会を再開したいので、会員を集めているとの事でした。まだ老人会にはほど遠い年齢だと、自身では思っていたのですが、五年もの避難生活は、自分をそれだけの年齢にする程、長いものだったのだとあらためて感じました。高齢者が多い三宅島と言われていて、これから介護やお世話やらと何かと大変な島になると言うイメージの中で、この様にいち早く自分たちの会を盛り上げようと動き出した老人会の凄さに感動しました。すぐ仲間に入れてもらいました。新しく役員も決まり、老人会の再出発です。神着老人福祉会館もまだ畳が綺麗になったのですが、今年度中には、部屋の整理も村で計画中的とのことでした。自分たちで掃除をして12月の定例会が和気藹々と行われました。ストレッチ体操、健康講話、カラオケ、読み聞かせ等々午後を楽しく過ごしました。

自分たちの手で徐々に作り上げて行こうとする、自分たちの居場所作り。一步一步確実に前へ前へと歩き始めています。大勢の方々が気軽に集えるすばらしい老人会になれるよう微力ながら、私も会員の一人として努力していきたいと思っています。

児童公園も整備完了、子供達も元気一杯外で遊べる場所も出来たことだし、子供達の笑い声とお年寄りの笑い声が、いつか二重合唱でハモって聞こえる。そんな素敵な三宅島になれることを夢んでいます。

(神着 早川 マス子)

NHK教育テレビ『みんな生きている』～島の人々のきずなを深めたい～ 放送のご案内

小学3～6年生の総合学習向けに放送されている『みんな生きている』で、三宅島のことが取り上げられました。三宅村合同音楽会の様子も放送されます。どうぞご覧ください。

<番組紹介より> 三宅島には、島のお年寄りたちが交流をする場所があります。名前は「風の家」。5年前に起こった火山の噴火をのりこえて、きずなを深めようとする人たちをえがきます。

放送日時：12月6日、8日、13日、15日 9:30～9:45

リウ・ミセキ写真展『脱皮/三宅島』のご案内

～坪田に別荘を持つリウミセキさんより、三宅島支援センターに個展のご案内が届きました～

このたび、三宅島をテーマにした写真展『脱皮/三宅島』を開催させていただくことになり、ご高覧いただきたくお知らせいたします。

噴火から5年経ったいま、三宅島はどう変わり、どこへ向かおうとするのか・・・。

30年間半島民として三宅島で過ごしてきた私リウ・ミセキが、噴火災害の現状を、ニュースとアートを織りまぜて、90点の写真にまとめ上げました。もちろん三宅島を取り上げた写真展としては初めてのことで。

復興に向けて頑張っている三宅島のみなさまや、いまだに帰れないままで東京で苦勞なさっている島民や、復興支援をしてくださっている方々へのエールとして制作いたしました。

私は毎日会場におりますので、どうぞお声をかけて下さい。

では、お待ちしております。

リウ・ミセキ

会期：12月15日～20日 11:00～18:30

会場：京セラコンタックスサロン・東京(東京交通会館7F / JR有楽町からすぐ)

<案内ハガキ>

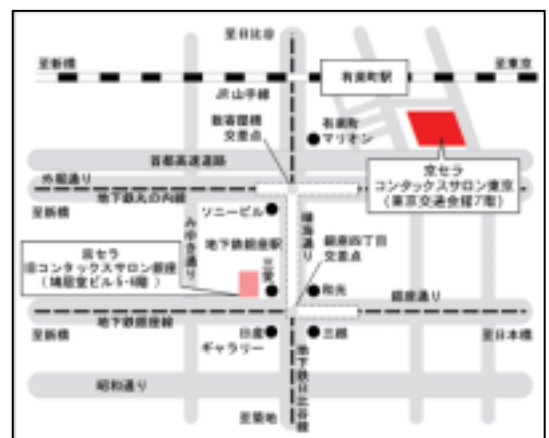
案内ハガキ挨拶より

三宅島に魅せられて30年が経つ。壁や天井に遮られない広がりを持つ「自然のスタジオ」を探し求めて、この島に巡り会った。黒い溶岩原がホリゾン、太陽がストロボという、無限に広い私だけのスタジオ。それは素晴らしい撮影環境だった。撮影の為の拠点としてアトリエを設けたのは39歳、昭和60年(1985)のことだった。人生の半分を過ごしてきた三宅島。今回2000年の噴火は全島避難という大きな不幸にな

った。4年半もの長い避難生活になり経済的にも精神的にも辛く苦しい二重生活を、島民たちは東京で過ごしてきた。その間に島を見ぬまま亡くなられた方も大勢いた。その無念、その不運を私は撮れるだろうか。自分に問いかけながら撮影を始めたのは帰島が正式に認められた2005年2月。どれだけ撮れたか、正直よくわからない。「三宅の鼓動はね、縄文の昔から20年が一拍だったんですよ。ドクンとね。いちいち悲しんでなんかいられません。ずーっとそうだったんですから。でもいいこともあるよ。紫陽花も珊瑚も伊勢エビもくさやも明日葉もテングサも、みんな若返るのさ。人間だってね。これ脱皮なのよ。三宅は蛇の尻尾だからね。島の老婆は笑って言った。



<会場案内図>



「みやけの風」へのご意見・ご要望を、三宅島支援東京センターまでお聞かせください。